

80年ぶりの再発見！ ツメナガイバラモエビ

千葉県立中央博物館 動物学研究科 主任上席研究員 駒井智幸

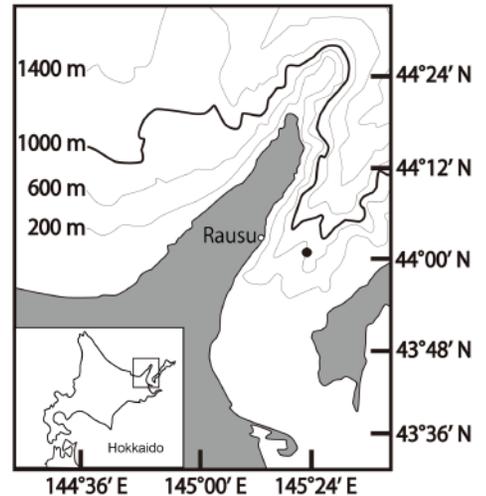
福島県の水族館「アクアマリンふくしま」によって行われている、北海道知床半島沖（根室海峡）の深海生物調査で採集されたエビ類の標本を調べたところ、1936年にロシア人研究者により新種として公表されて以来、発見例のない種 *Lebbeus longidactylus* (Kobjakova, 1936) であることが明らかとなりました。この種（新称：ツメナガイバラモエビ）を再記載し、特徴を明らかにする論文をアクアマリンふくしまの研究者との共同研究として論文をこのたび発表しました。本種の **80年ぶりの再発見** となります。

論文：Komai, T., Matsuzaki, K. & Hibino, M. 2016. Rediscovery and redescription of a deep-sea shrimp *Lebbeus longidactylus* (Kobjakova, 1936) (Crustacea: Decapoda: Caridea: Thoridae) based on material from the Nemuro Strait, southwestern Sea of Okhotsk. *Zootaxa*, 4175: 390–400.

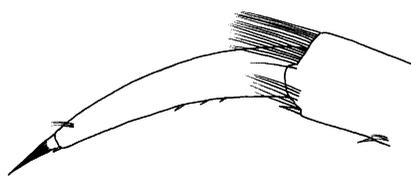
イバラモエビ属 *Lebbeus* とは？ コエビ下目ヒメサンゴモエビ科の一属で、現在のところ約 67 種が知られています。属としての分布は非常に広く、両極域～低緯度海域に及びます。生息水深も幅広く、潮間帯に生息する種から水深 2600 m に及ぶ深海に生息する種もいて、とても多様です。しかし、各種の地理的分布は狭い範囲に限られていることが多く、地域固有性が高いと考えられています。筆者は本属の分類学的研究を継続していて、これまでに 16 種を新種として公表し、分類学的な位置付けが不明瞭な種の再評価なども進めてきました。

発見の経緯は？ 知床半島にある羅臼町では、深海底にエサを入れたカゴをしかけてエビ（主にラウスブドウエビ）を採るエビカゴ漁を行っています。アクアマリンふくしまでは、漁師さんの協力を得て、このエビカゴ漁で混獲されるさまざまな深海生物を収集し、展示や研究に利用しています。2014～2015年の調査により、水深 600～800 m の場所で採集されたエビ類の標本を調べたところ、1936年にロシアの研究者 Z. I. Kobjakova 博士によりオホーツク海で採集された標本によって記載された *Lebbeus longidactylus* に一致する標本が見つかり、今回の発表となりました。

ツメナガイバラモエビの特徴 一見したところ、「普通のエビじゃないか！」という声が聞こえそうですが、歩脚（第3～第5胸脚）の指節（一番先端の爪のような節）が細長く、下縁の棘が微小で基部にしかないという、イバラモエビ属の他種にはほとんど見られない特徴を持っています。他の大多数の同属種では、これほど細長くはならず、先端は二又し、下縁には明瞭な棘が全長にわたって並んでいます。この指節の特徴は、発表翌年の論文（Kobjakova 1937）に掲載された本種の図にも描かれており、同定の決め手となりました。



ツメナガイバラモエビが採集された地点。羅臼の東沖、水深 600～800 m の斜面。



ツメナガイバラモエビの歩脚の指節。細長く、下縁に棘は非常に小さく、基部側に限定される。



イバラモエビの指節。イバラモエビ属の大多数の種においてこのような形状をしている。

本研究の意義 分類学では、新種を発見するだけでなく、過去に発見されながらも、実体が不明な種を再検討したりするのも重要な仕事です。オホーツク海には、他にも原記載以降、50～80年にわたって記録のないエビ類が数種存在し、今後の調査が待たれています。

今回再発見されたツメナガイバラモエビですが、底曳網などの調査器具を利用できない急峻な海底を生息場所としているらしく、そのため研究用の標本がなかなか研究者のもとに届かなかったというのが実状です。海の中には研究目的の調査の及ばない場所がまだまだあるのだということを痛感します。根室海峡では、今後も新種の発見や、長い間報告例のなかった生物種の再発見が期待されます。



A, ツメナガイバラモエビの♀。B, 同種の♂。生時の色彩を示す。